

中世高野山教學における煩惱論

——宥快の根本無明解釋を中心に——

はじめに

宥快（一三四五〜一四一六）は室町時代に主として高野山で活躍した眞言宗の學僧である。數多くの眞言教學に關する著作、註釋書類を残したことで知られ、高野山の教學を大成した人物として教學研究上重要視されている。しかし、宥快は立川流や教主主義に關する研究などはあるものの、彼の教學全體を通觀した研究はほとんどないといえる。

本稿では、宥快の教學における煩惱論、特に『大日經』の三劫段と『釋摩訶衍論』の根本無明に關する議論を取りあげ、宥快がどのように眞言宗所依の經論と空海の説を會通したのか、その説が後世に傳えられていった様相について考察して

みたい。

林 山 まゆり

一 『大日經疏鈔』における宥快の見解

『大日經』に説かれる煩惱というところ、まず住心品の三劫段の百六十心が挙げられる。『大日經』三劫段は、空海の十住心思想の典據となっているだけではなく、しかも、一行による註釋書『大日經疏』の釋に「若一生度此三妄執、則一生成佛」と一生成佛の語が見えるということからも教理上重要視されている箇所である。

まず、『大日經』の三劫段について基本的事項の確認を行う。以下、少々長くなるが、『大日經』三劫段を引用する。

祕密主、一二三四五再數、凡百六十心。越世間三妄執、

出世間心生。謂如了解唯蘊無我、根・境・界淹留修行。拔業煩惱株机、無明種子生十二因緣。離建立宗等。如_レ是湛寂、一切外道所_レ不能_レ知。先佛宣說離一切過。秘密主彼出世間心住蘊中、有_レ如_レ是慧隨生。若於蘊等發_レ起離著。當觀察聚沫・浮泡・芭蕉・陽焰・幻等、而得_レ解脫。謂蘊處界、能執・所執、皆離_レ法性。如_レ是證寂然界、是名_レ出世間心。秘密主、彼離_レ違順八心相續、業煩惱網。是超_レ越_レ一劫_レ瑜祇行。

復次秘密主、大乘行。發_レ無緣乘心、法無_レ我性。何以故。如彼往昔如_レ是修行者、觀察蘊阿賴耶、知_レ自性如_レ幻・陽焰・影・響・旋火輪・乾闥婆城。秘密主、彼如_レ是捨_レ無我。心主自在覺_レ自心本不生。何以故、秘密主、心前後際不可得故。如_レ是知_レ自心性、是超_レ越_レ二劫_レ瑜祇行。

復次秘密主、眞言門修行菩薩行。諸菩薩、無量・無數百千俱胝那庾多劫、積集無量功德・智慧、具修_レ諸行。無量智慧・方便、皆悉成就。天人世間之所_レ歸依。出過一切聲聞・辟支佛地。釋提桓因等、親近敬禮。所謂空性、離_レ於根境。無_レ相無_レ境界、越_レ諸戲論。等虛空無邊一切佛法、依_レ此相續生。離_レ有爲・無爲界、離_レ諸造作、離_レ眼

中世高野山教學における煩惱論（林山）

耳鼻舌身意、極無自性心生。秘密主、如是初心、佛說_レ成佛因_レ故。於業煩惱解脫、而業煩惱具依。世間宗奉常應_レ供養。

復次秘密主、信解行地、觀察三心・無量波羅蜜多慧觀・四攝法。信解地、無對、無量、不思議。逮_レ十心_レ無邊智生。我一切諸有所說、皆依_レ此而得。是故智者、當思惟_レ此一切智信解地、復越_レ一劫_レ昇_レ住此地。此四分之一度_レ於信解。

ここである劫とは、『大日經疏』の解釋によれば、時間という意味ではなく、妄執すなわち煩惱の意味であると理解される。つまり、第一劫、第二劫、第三劫と次第に越えることによつて世間三妄執を斷じ、信解行地に入ると解釋することができる。

先に述べたように、空海はこの三劫段の言説を典據として、自身の十住心思想を打ち立てている。空海の十住心配當は、後の台密の學匠達から批判される₍₃₎ところとなる。本論ではそのことについて觸れないが、東密の三劫段解釋においても、三劫を初地以前に超えるのか、初地以降に超えるのかといった議論がある。例えば、賴瑜（二二六〜一三〇四）の『大日經疏指心鈔』（以下『指心鈔』とする）では次のように述べて

いる。

私云、朝響意依鈔義專成地前一劫地上二劫之旨也。

傳法院覺心義亦同之。本寺道範義高野古德等多分義也。

是三劫地前義也。初義意三賢是初僧祇。初地乃至七地第

二僧祇。八地以上第三僧祇之義。諸經論施設。敢以無違

矣。今宗又爾也。

ここには、まず、朝響（重響）や傳法院覺心の義として、初地以上で第二劫以降を超える説が示され、次に賴瑜・道範・

高野の古徳の義として、三劫を地前に超えるとする義を擧げている。有快は三劫を地前に超えるという賴瑜・道範と同じ

説を採り、「今大日經宗意、三劫地前被建立見故、超越三劫至處佛慧初心、可初地云事明也。」と述べている。すな

わち、三劫を地前に超え、佛慧の初心には初地の段階で入るとする。眞言宗ではとりわけ初地を重んじる傾向があり、こ

のことからも、眞言宗の教學においては初地を中心とした議論が多く展開されている。

以上を踏まえつつ、本論に入ることにはしたい。

本稿で特に取り上げるのは、三劫段の冒頭部分を註釋した『大日經疏』の次の箇所である。

經云、祕密主、一二三四五再數、凡百六十心。越世間三

妄執、出世間心生。乃至四分之一、度於信解者、亦是

答諸心想及心殊異也。由有無明故、生五根本煩惱

心。謂貪・瞋・癡・慢・疑。所以不説五見者、以屬

見煩惱多在六十心中也。此五根本煩惱、初再數爲十、

第二再數成二十、第三再數成四十、第四再數成八

十、第五再數成一百六十心、故云一二三四五再數成

百六十心也。

ここでは、百六十心が五つの根本煩惱である貪・瞋・癡・慢・疑を五回倍増させたものであることを説明している。傍

線部分には「由有無明故、生五根本煩惱心」という一文が見え、この「無明」の理解が中世の學僧達の間でも解釋の

分かれるところとなっている。つまり、この「無明」を五根本煩惱中のいずれかに相當させて理解すべきなのか、また

は、根本となる五つの煩惱を既に擧げつつも、さらに五根本煩惱の外に能生の無明が存在すると考えるべきなのか、といった議論である。

この問題に關して、有快の解釋を検討する前に、有快以前に活躍した學匠がどのような説を擧げていたのか、道範（一

一七八〜二五二）・賴瑜・杲寶（二三〇六〜三三六）の解釋を

參照してみたい。

まず、有快と同じ高野山の學僧として知られる道範『大毘盧遮那成佛經疏遍明鈔』(以下『遍明鈔』とする)では能生の無明について以下のような問答を示している。

問。此一種子者何法乎。

答。無明也。

問。此無明者與五根本中癡同異如何。

答。於無明雖有種種異說釋、俱舍說十使生起次第

頌云、無明・疑・邪・身・邊見・戒・見取・貪・慢・瞋

如次⁸、是以癡云無明也。大乘義章十使義利鈍分別中

五種中貪・瞋・慢・疑一向是鈍、無明不定⁹、是以癡

呼無明也。仍無明即癡也。

道範は、『俱舍論』の十使生起次第の頌や『大乘義章』の十

使の義を證文とし、五根本無明中の癡煩惱を能生の無明として理解するという義を出している。

『遍明鈔』は、禪林寺靜遍の相承を道範が記述したものであり、三點(轉)説に基づく佛身論が説かれることなどから、有快は『遍明鈔』について否定的な一面を持っていたことが既に指摘されている。右に見た箇所直後には『釋摩訶衍論』⁽¹²⁾についての言及も見えるが、貪・瞋は四相の異相人執品に見え、根本無明の有爲の別法であると言うのみであって、能生

中世高野山教學における煩惱論(林山)

の無明との關わりについては述べていない。

次に賴瑜・杲寶の釋を檢討する。賴瑜・杲寶については那須政隆氏による解説があるのでそれを参照したい。那須氏は賴瑜の説について、以下のように説明する。⁽¹³⁾

『指心鈔』第九に三説を出す。その第一義に依れば草木の果實と樹幹と樹根と三者がそれぞれ別なる如く、無明と五根本煩惱とは別體であるとする。その第二義は無明なるものは、五根本煩惱が中の癡煩惱とその體同一である。而して五根本煩惱は之を廣く見るときは、その體は同一なれども、五が中にて癡煩惱最も強勝なるが故に、且く之を能生とせるまでにして、その體に至りては一であるとする。その第三義に依れば、無明と五根本煩惱とは體と用との異りにして、兩者の間に別體あるに非ずと立てる。以上の三説の中にて瑜公は三義を正義としている。

ここで那須氏は賴瑜の義として第三義を採るとしているが、原文を見ると第二義を採ると明記されているので、これは第二義の誤りであろう。第二義と第三義はいずれも無明と五根本煩惱は別體ではないという説であるが、賴瑜は特に第二義の五根本煩惱中の癡煩惱が能生の無明であるとする説を

探っている。これは道範の説と近似している。

また、那須氏は臬寶の採った説については、「次に臬寶師は上の三義の中にてその體一なりと見るは一往の説にして、體別と見るは再往の義とす。仍つて臬寶師は瑜公と反對に體別とせるものの如くである。」と説明している。つまり、臬寶は、五根本煩惱の中に能生の無明があるとす説と五根本煩惱の外に能生の無明があるとす説の兩者を認めながらも、五根本煩惱の外に能生の無明を認めるといふ義を採擇していたといえる。臬寶の『大日經疏鈔』では、このような一往の説と再往の説については、遮情と表徳の別であるとしてい(15)る。

それでは、有快の解釋はどのようなものであったのか。次に有快の『大日經疏鈔』を見ていくことにしたい。

『大日經疏鈔』は全八十五卷。『大日經疏』の住心品のみを註釋したものであり、有快の講義を弟子が筆記したものである。この講義のあつた年は明らかになっていない。『同鈔』巻五七では次のように述べている。

由_レ有_二無明_一故生_二五根本煩惱心_一。謂_レ貪・瞋・癡・慢・疑。所_レ以_レ不_レ說_二五見者_一、以_二屬_レ見煩惱多在_二六八心中_一也。此初示_二惑體_一。此中初舉_二五根本煩惱_一。次所以不_レ說下

示_レ不_レ說_二五見_一由_上。

付_レ之_二所生_二五根本煩惱_一、表_レ貪・瞋・癡・慢・疑名字_一故分明也。能生無明其體何乎。

答。付_レ之_二料簡_一不同也。①「義云、能生無明者、十煩惱

中癡煩惱也。唯識論諸煩惱生必由_レ癡故_一。此意以_二癡煩惱_一爲_二諸惑能生_一。又俱舍論說_二十使生起次第_一、無明・

疑・邪・身・偏見・戒・見取・貪・慢・瞋如_レ次_一。又大

乘義章十使義此等意分明也。但付_レ此義、能生・所生待

對、約法警次第得意、一往相違歟。其故先法華意無明

能生。五根本煩惱所生聞。何以_レ所生五根本煩惱中癡煩

惱。還能生無明可_レ得意乎。又警意一自_二種子_一生_二五根

本見_一。是又種子・根本各別也。爾者如何。答。以_二癡煩

惱爲_二所生_一故。實所生法可_レ四種_一而云_二五根本煩惱言

總也_一。抄意也②「義云、以_二五根本中癡煩惱_一付_レ爲_二能

生_一。分_二體_一・用_二能生_一・所生義可_レ得意。例如_レ云_二釋摩訶

衍論依_二不如別用_一・存_二無明體_一。此賴論一義也。同正智院義也。③「義云、今

疏家能生所生分別分明故、五根本外別立_二能生無明_一可_レ

得意_一也。警意種子與_二樹根_一各別也。隨而今疏上文、無明

住地三毒之根_一。是夫以_二無明_一爲_二三毒根本_一。又眞言問答

云、問。此五根本何爲_二種子_一。答。無明是種子_一。又大師

三妄執外出。微細妄執。三妄是五根本煩惱分。麁・細・極・所・建立也。第四微細妄執是能生根本無明也。但付之若五根本外有無明別體、雖斷三妄猶可有無明別體。然今疏意、所斷惑不_レ出三妄。仍五根本外有無明別體云事一往不審也。爾者如何。答。枝末煩惱盡時根本無明同盡故。今疏別不_レ立能生無明斷位歟。凡惑建立不_レ一准。彼唯識・俱舍等性相疑煩惱外別不_レ立無明。三論五住地中第五無明住地是所知障也。彼所知障名無明。先四住地煩惱障也。天台見思・塵沙・無明三惑立。二障外別立無明。又釋論家意二障門外立二礙門。如此有_レ邊邊中、今疏意五根本外被_レ立能生無明也。此學者一義也。賴瑜義又同之。

④ 一義云、今名無明名五根本煩惱非別體。無明者總名、五根本者別名也。意、一切煩惱總名無明。此最初離分五根本煩惱也。乃至展轉再數成百六十七心八萬塵勞也云。問云、若爾者、何釋生五根本、又取種子譬乎。答。今生者非能生生。五根本分云生也。譬准法可_レ知也。已上三義也。能能分別可_レ治定。

宥快は『大日經疏』の「無明有るに由る」という語句について、四つの解釋を擧げている。便宜上それぞれの一義に①④の番號を付した。右の引用の最後に「已上三義」と見え

中世高野山教學における煩惱論（林山）

るのは、①と②の義がほぼ同じ見解であることから、宥快が「三義」と看做したのではないだろうか。

これら四つの一義は、先に述べた學匠たちの見解と概ね合致する。割註を参考にしつつ、簡単にそれぞれの説の義とその説を擧げる學匠を對應させてみると以下のようなになる。

- ① 癡を能生の無明とする。 ∴道範
 - ② 癡を體・用に分けて、能生・所生の義とする。 ∴道範・賴瑜
 - ③ 五根本煩惱の外に能生の無明を立てる。 ∴賴瑜・杲寶（再往の義）
 - ④ 能生の無明と五根本煩惱は別體ではない。 ∴杲寶（一往の義）
- ③に賴瑜の名が擧げられるが、先に見たとおり賴瑜は癡を能生の無明とする義を採るので、③は賴瑜の著作に見られる義の中の一つとして理解すべきであろう。
- このように『大日經疏鈔』において、四つの先徳の釋をただ並べているだけのように見えることから、那須氏は、「正義を決擇していない。」として、宥快は本箇所では自身の説を明らかにしていないと捉えている。
- 宥快がただ一義を並べるだけで自身の釋を述べないといっ

た註釋の方法は本箇所だけではなく、有快による註釋の特色としてしばしば見られるものである。しかし、有快は決してただ機械的に先徳の一義を並べているだけではない。能生の無明に關する『大日經疏鈔』の他の箇所の有快の見解や有快以降の論義書を参照してみると、有快は③の五根本煩惱の外に能生の無明があるとする説を採っていたと推定できる。その根據として挙げられるのが、同じく有快の『大日經疏鈔』で、次のように記している箇所である。

妄想因縁者、能生根本無明。所有煩惱・業・苦、所生枝末上煩惱・業・苦三道相當也。清淨除滅煩惱・業・苦三道。卽莊嚴祕藏萬德。心佛所具密號覺義也。經文配合意得、菩薩住・此道時、菩薩住・此修學義。從妄想因縁等、不久勤苦使得除一切蓋障三昧釋可_レ見歟。付_レ之能生根本惑妄想有御釋事、心地觀經由妄想緣起諸煩惱說、菩提心論夫迷途之法從妄想生、乃至展轉成無量無邊煩惱・輪迴六趣_レ名義俱同也。凡能生無明說、華嚴不正思惟說、涅槃經不善思惟說、一卷金剛頂經本有俱生障等說、菩提心論或說妄想、或名無始間隔、釋摩訶衍論根本無明釋。今疏家由_レ有無明故、生五根本煩惱釋、高祖微細妄執有御釋。是皆一法異名也。今疏前

後彌綸⁽¹⁸⁾。

ここでは『大日經疏』に見える妄想の因縁について説明がなされている。特に後半の傍線部分に、能生の無明と他の經典に説かれる煩惱との關わりについて言及されている點に注目したい。『大日經疏』に見える能生の無明は、『華嚴經』に説かれる不正思惟、『涅槃經』に説かれる不善思惟、『金剛頂經』に説かれる本有俱生障、『菩提心論』の妄想・無始間隔、『釋摩訶衍論』の根本無明と一法の異名であると述べている。

このことから、有快は五根本煩惱の外の能生の無明を『祕藏記』の微細妄執や『釋摩訶衍論』に説かれる根本無明と同じものであると比定していると理解することができる。

眞言宗所依の經論に説かれる様々な能生の無明がすべて同體の一惑であるという考えは、有快以後の學僧にも受け繼がれて行くことになる。その一例として印融（一四三五―一五一九）の『杣保隱遁鈔』には次のような記述が見られる。

重答。一、御難分明候。凡思疏家解釋候、五根本外別可有能生無明見候。其校合前重可_レ如成申候。其上餘教此教不同候共、於能生根本無明其體一種候。隨先徳釋、釋論根本無明、菩提心論無始間隔、疏家由有無明、大師微細妄執、同體一惑被_レ判候。

印融は五根本煩惱の外に別の能生の無明があるのか否かといった問いに對し、「先德釋」として『菩提心論』の無始闇隔や疏家の由有無明、『祕藏記』の微細妄執が同體の一惑であるという宥快と同じ説を擧げている。このことから「先德」とはおそらく宥快のことを指すのであろう。

では、『大日經疏鈔』の③の義は一體どのような説であるのか。具體的に内容を検討してみると、『祕藏記』や『眞言問答』（『雜問答』）といった中世において空海の著作と看做されていた書や『釋摩訶衍論』といった空海が依據した論書などの記述に據った説であるとわかる。特に傍線部に「第四微細妄執是能生根本無明也」とあることから、『祕藏記』の「越三妄執越三僧祇劫、是卽十地究竟也。過此修上上方便、斷微細妄執至佛果故」という微細妄執説が五根本煩惱の外に能生の無明を置く一大根據となつていてと考えられる。『祕藏記』は、現在の研究によると空海の時代ではなく、後世に成立した書物であると考えられている。⁽²⁰⁾しかし、宥快の頃には、『祕藏記』を空海が入唐した際に惠果より授かった口決として空海の手を介して伝えられたものと考えて『祕藏記』の説を重要視している。⁽²¹⁾

以上のことから、宥快が③の義をとり、五根本煩惱の外に

中世高野山教學における煩惱論（林山）

能生の無明があると看做す説をとっていたのであろうということが明らかにした。また、宥快の理解として、『祕藏記』の微細妄執と『大日經疏』の能生の無明だけではなく、『釋摩訶衍論』や『菩提心論』といった論書に見える無明も同體の一惑であると看做していたことがわかった。

また、この宥快の説が後世の高野山の説として認められていたとする例として、高野山の義を決擇した書である『宗義決擇集』の教説が擧げられる。『宗義決擇集』には「由有無明」と題される論義が収録され、その論題の下に宥快の名を記して次のような議論を展開している。

問。疏云「由有無明・故生五根本煩惱心」。爾者可五根本煩惱外別有能生無明乎。

答。此義疏釋文不委悉。故、學者所解不一準。或云、五根本中癡煩惱爲能生。或云、五根本總體釋。由有無明。或云、別有能生無明。故難一定歟。雖然能生・所生對辯分明故、別有能生無明之義、應答也。⁽²²⁾

『宗義決擇集』では學者の解釋はそれぞれ一準ではないとして、三つの義を擧げている。すなわち、癡煩惱を能生の無明と看做す道範の説、高野八傑の一人に擧げられる信日（八六〇〜九一六）の五根本煩惱の總體を能生の無明と看做す説、

また誰の説であるかを明らかにしないが、能生の無明を五根本煩惱の外に立てるといふ説である。この三種の説を擧げながらも『宗義決擇集』では、「雖然能生・所生對辯分明故、別有能生無明之義、應答也。」とし、五根本煩惱の外に能生の無明を立てるといふ有快の『大日經疏』と同様の義を採擇している。

二 『釋摩訶衍論』に見える根本無明と三劫段

根本無明とは、『釋摩訶衍論』に見える煩惱である。『釋摩訶衍論』は『大乘起信論』の註釋書であるが、根本無明は、『大乘起信論』において具體的に述べられることがない。『釋摩訶衍論』の根本無明については、森田龍僊『釋摩訶衍論之研究』やその他に詳しい考察がなされている。『釋摩訶衍論』卷四「根本無明住地門」では、根本無明を具體的に分析し、六無明・十住地に分類している。有快は、『釋摩訶衍論』の註釋書である『釋摩訶衍論鈔』や『釋摩訶衍論』に関する論義書である『釋論決擇集』を著し、その中で根本無明をめぐる問題について論じているが、『釋摩訶衍論鈔』や『釋論決擇集』における根本無明の解釋は有快独自のもの、というわけではなく、基本的に有快以前の眞言宗の學僧たちの解釋を

受け継いだものようである。

しかし、『釋摩訶衍論』と『大日經疏』における無明を同體の惑と看做す點については、これら二論の立場が異なっていることから、それぞれの無明の定義も異なり、同體と見ることは難しいと指摘できる。

次に、このような二論の無明釋に関する有快の解釋を見てゆきたい。

まず、『大日經』三劫段で越えるべき煩惱について、『大日經疏』には以下のように言う。

△超度人法有無二障等²³ 此有無二障得^レ意。一義、人・

法與有・無二障也。人・法二執即煩惱・所知二障也。

人執初劫度^レ之。法執第二劫斷^レ之。但於初劫中證寂然界菩薩離二重法倒^見。

すなわち、初劫に度するのは人執であり、第二劫で度するのは法執であるとする。人執・法執と根本無明に関する記述は、有快の『釋論決擇集』にも見え、『釋論決擇集』の解釋と『大日經疏』の解釋を合わせて根本無明または能生の無明を理解すると矛盾が生じる。『釋論決擇集』に見える人執・法執に関する記述とは次に擧げるようなものである。

問。就^レ云無明之海可謂根本無明爲法執乎。

答。此義難レ定。或云三執外立根本無明、或云根本無明是法執細惑。於レ中今應レ成立法執之義⁽²⁵⁾。

この答中には、根本無明を法執と看做す義を立てている。

根本無明は先に述べたように三劫の外で破する微細妄執と同體の一惑と看做されることから、これは先ほど見た『大日經疏鈔』の義と相違してしまふ。

さらに、眞言宗所依の經論である『菩提心論』にも人執・法執という煩惱の斷位について次のような記載が見られる。

問。前言「二乘之人、有法執故、不得成佛。今復令修菩提心三摩地者、云何差別。

答。二乘之人、有法執故、久久證理。沈空滯寂、限以劫數、然發大心。又乘散善門中經無數劫、是故足レ可厭離。不レ可依止。今眞言行人、既破人・法二執。雖能正見眞實之智、或爲無始間隔、未能證於如來一切智智、欲求妙道、修持次第、從凡入佛位者⁽²⁶⁾。

『菩提心論』では、二乗の人はまだ法執にとらわれているので成佛ができないが、眞言の行人は人・法の二執を破している。このように『菩提心論』の教説をそのまま依用しようとする

中世高野山教學における煩惱論(林山)

と、『釋論決擇集』で宥快が述べている根本無明を法執とするという教説と矛盾してしまふ。この『菩提心論』の説について、宥快は自身の『菩提心論』の註釋書である『菩提心論鈔』では三摩地段を不讀段として註釋を残していないため、今問題となっている箇所への言及は見られない。そこで、宥快の弟子にあたる快全の『菩提心論三摩地段抄』の記述を参照することにした。

謂、人執者、是麁妄執、初劫所斷也。法執者、是細妄執、第二劫處超。雖能正見等者、細妄執已盡覺心不生也。或爲無始間隔者、第三劫極細竝微細妄執也⁽²⁷⁾。

快全は根本無明や能生の無明と同體と見なされる『菩提心論』の無始間隔について述べた箇所、人執を麁妄執、法執を細妄執、そして無始間隔は第三劫の極細妄執および微細妄執であるとしている。つまり、快全の註釋では、根本無明を法執であるとする『釋論決擇集』説との矛盾は解消されないままなのである。

では、宥快は根本無明を法執と看做す説をどのように解釋しているのか。『釋論決擇集』では次のような問答が見える。

問。根本無明法執之義眞實證據如何。

答。此義有レ習。尤應レ祕也。大日經說三妄執初劫麁妄

執是人執。第二劫細妄執是法執。第三劫極細妄執は無明也。然名極細妄執與執名字故以此爲誠證。尙於此上微細妄執亦名執故無非執惑。就中生滅門內五有爲中根本無明、第二劫細妄執分齊。過此最細極細・微細猶名執者乎。⁽²⁸⁾

右の問答では、根本無明が法執である證據として『大日經』三劫段の文を引用して、第一劫の鹿妄執は人執、第二劫の細妄執は法執、そして第三劫の極細妄執は無明であると述べている。しかし、微細妄執に至るまでを執と名付けていることから第二劫以上であっても法執の分域であるという。このよ
うな説明によって、根本無明が法執であることは、微細妄執
と同一であると考えることの妨げとならないと會通している
のである。

三 微細妄執の斷位について

—「初地即極」との関係—

眞言宗では「初地即極」といった論題があるように、初地の段階で佛位に入ること認めているため、初地という位を重視する。しかし、『祕藏記』の微細妄執は十地を超えた位においての斷惑を示唆しているように見える。そのことから、

有快のように能生の無明を三劫の外にも認める義を重んじた場合、微細妄執はいったいどの位で斷じられるのかという問題が浮上してくる。そこで最後に、「初地即極」をめぐる問題について検討してみたい。

まず、有快の『大日經疏鈔』卷五七には初地と三劫の関係について次のように述べられている。

雖如此義勢多端、今大日經宗意、三劫地前被建立見故、超越三劫至處佛慧初心、可初地云事明也。⁽²⁹⁾

つまり、三劫を超えて至る佛慧の初心の位を初地と見なし
ていることが窺え、初地即極という義を考えると、三劫以上
には斷ずべき惑が無いという理解が可能となる。

一方、『祕藏記』では次のように見える。

越世間三妄執・出世閒心生、三妄執貪・瞋・癡。開百六
十心乃至八萬塵勞。越三妄執越三僧祇劫、是即十地
究竟也。過此修上上方便、斷微細妄執至佛果故、
經曰：此四分之一度於信解。⁽³⁰⁾

傍線部分に見るように、ここでは、十地究竟してさらに後
に上上方便を修することを説いている。しかし、この『祕藏
記』の「十地究竟」や「十地究竟の後の上々方便」という語
句をそのままに理解すると、三劫を超え、十地を超えた後、

さらに上々方便を修して微細妄執を斷じる必要があるということになる。

このような『大日經疏』と『祕藏記』の立場の相異について、宥快は次のように主張している。

越三妄執^キ付^レ之疏家解釋意、地前盡三妄執至初地、見當段解釋斷三妄十地究竟見。是又疏家大師解釋相違。此心得一義云、今十地者、大日經宗十地異也。是即地前立十地性相也。此十地常途十地也。指至佛果所佛果初地可心得也^云。一義云、如常三劫建立以後二僧祇置地上性相也。三劫地前地上可交合也。此時以當段御釋爲本可心得也。付之於初地自證圓極歟事、一尋也。

過此修上方便者、過三句修上方便云意也。

斷微細妄執者、於大日經疏三劫外其惑體不見。仍第三劫極細妄執中開眞言行者所斷惑爲微細妄執。是即當能生由有無明^云。

至佛果故者、或取佛地或取初地二義如^上。

前半部分では、三妄執を超えることに關して、『大日經疏』と空海の解釋が相違していることを指摘したうえで、『祕藏記』において説かれる十地には、地前に常途の十地を立てる

中世高野山教學における煩惱論（林山）

という義と第二劫から十地を立てるという義の二種の義があるとしている。しかし、いずれの義にせよ十地の階梯を登る必要はあり、「初地不極」ということになってしまったため、中世の眞言教學が強調する「初地即極」の考えと抵觸してしまう。

一方、傍線部の「斷微細妄執」の釋では、三劫の外に惑體を見ず、第三劫中の眞言行者の惑を微細妄執として開いて理解することになるので、枝末煩惱が盡きる時に能生の無明も盡きるという説を宥快は擧げている。

微細妄執と十地における斷惑の問題については、『宗義決擇集』において宥快の義として以下のような會通がなされている。

次斷三妄入初地故、不可三妄外有能生無明者、此如前已會之。如釋論云斷四相證佛果、而彼不別明斷無明而成證果義此亦如此。雖不別明微細妄執而云斷三妄至初地義亦無相違。是即眞言行者盡極細妄執時、同時斷微細妄執也。如彼生相盡時無明亦盡也。夫微細妄執斷位者、若初地即極義、則斷極細妄執時、同時斷微細妄執直至初地、若約初地不極之義則應十地滿足後修上々方便方斷微細妄

執也。爾者不可相違者也⁽³²⁾

すなわち、微細妄執は極細妄執を斷じるときに同時に斷じられるものだとし、微細妄執の段位を初地即極の場合と初地不極の場合の二種を擧げて説明している。

まず、「初地即極」の場合、眞言行者は第三劫で斷すべき極細妄執を斷じる際、同時に微細妄執も斷じてただちに初地に入るとし、「初地不極」の場合は十地を満足して後、上上方便を修して初めて微細妄執を斷じるとする。つまり、『祕藏記傳授鈔』で見たような微細妄執を他の妄執と同時に斷じるとする義を「初地即極」の義に合致した解釋とし、「十地究竟」や「上々方便」と解釋することを「初地不極」の義に即する解釋であると會通しているのである。

『祕藏記』の教説は『大日經疏』の説と相違しているにもかかわらず、宥快は『祕藏記』の説を取り入れ、能生の無明が五根本煩惱の外にあるという義を立てる。それはひとえに宥快が『祕藏記』を空海の思想を反映していると信頼し依用していたためであろう。

結

『大日經疏』の能生の無明について、まず宥快の採った一義

について考察し、次に能生の無明と根本無明の関係における二點の問題から宥快が『大日經疏』の三妄執の説と『祕藏記』の微細妄執との教説をいかに會通したのかについて見てきた。

宥快の研鑽が教學上重視されてきたことは改めていうまでもないが、なぜ重視されてきたのかという點に關する研究はほとんどない。それは宥快が残した膨大な註釋書群の多くが先師の釋を並べ連ねているだけであり、宥快自身の義を示さないように見えるからである。しかし、以上見たように宥快は、高野山の教義として採るべき義を示していたと考えられるのである。

空海以降の眞言教學とは、眞言宗所依の經論と空海の著作との矛盾を解消するために盡力してきた多くの學匠たちの研鑽の上に構築されている。宥快の説が後世の論義書に多く用いられるようになるのは、眞言宗の所依の經論と空海の義を巧みに會通し解決する技術に長けていたことと、先師たちの説を多く引用し後世の學僧の便を計ろうとしたためではないかと考える。それが却って宥快の自説をわかりづらくしている原因となっていないだろうか。

今回取りあげた問題は、宥快の教學全體から見るとその一

端にすぎない。勿論、有快の思想を知るためには有快の著作を部分的にはなく全體的に見なければ、その意圖するところは見えてこないであろう。しかし、まず、取り組むべき課題として、「一義云」として引用されるような典據不明の引用の解明とそれらの中から有快の採った義を丁寧^{ていねい}に拾^{ひろ}っていくといった基礎的な作業が重要となるであろう。

注

- (1) 大正三九・六〇〇頁下。
- (2) 大正一八・三頁上〜中。
- (3) 台密における三劫段の解釋については、大久保良峻『台密教學の研究』第一章『大日經義釋』の教學と受容』參照。
- (4) 大正五九・七一〇頁上。
- (5) 朝聖の義は、『祕宗教相鈔』(大正七七・五六九頁中)に見える。覺心の義については典據未詳。
- (6) 『通明鈔』卷一九(續真全五・四二二頁下)には「問。淨菩提心以上者何位乎。答。淨菩提心者初地也。仍初地以上十地向信解中行未^レ至^レ究竟一切智也。是仁王經唯佛頓解不名爲『信者此義也』と見える。
- (7) 『大日經疏鈔』卷五七、大正六〇・二六三頁下〜二六四頁上。
- (8) 大正三九・六〇〇頁中〜六〇一頁上。

中世高野山教學における煩惱論(林山)

- (9) 續真全五・三二九頁下〜三三〇頁上。
- (10) 『阿毘達磨俱舍論』卷一九、大正二九・九九頁中。
- (11) 『大乘義章』卷六、大正四四・五八四頁中。
- (12) 靜遍相承の三點説については、次のようなものが挙げられる。中村正文「禪林寺靜遍の提唱した教學について―特に教主論を中心として―」。同「靜遍僧都の信仰の一側面について」等。中村前掲論文には、賴瑜『瑜祇經拾古鈔』には靜遍の三點説を否定した説が見えることが指摘される。賴瑜と道範の關係については、小林靖典「中性院賴瑜の加持身説について―禪林寺相承の教主義との關係をめぐって(一)―」(同(2))や山口史恭「賴瑜の思想形成における道範の位置―特に『瑜祇經』解釋を例にして―」等參照。
- (13) 那須政隆『大日經口疏講義』一三九頁。
- (14) 『指心鈔』卷九(大正五九・七〇六頁中)には、「疏由有無明故等者、五根本外存^レ無明別體。歟。能所生義別故。又譬樹根種子別故。故疏上文云、無明住地三毒之根^々。雜問答云、問、此五根本何爲種子。答、無明是種^々。又大師三妄外更出微細忘執。疏下文學^レ無明父母極細之垢^一矣。又義云、五根本中癡強勝故且云能生也。非^レ有別體也。故疏下文云、謂五根本煩惱及百六十隨煩惱^々。性相釋云、諸煩惱生必由癡故^々。諸惑生必由癡。癡未必依^レ諸惑故云爾也。五根本外非^レ有別無明也。又義云、約^レ體用且爲^レ能所生。非^レ別法歟。例如^レ云因不如^レ故得^レ起而有^レ矣。此三義中初義爲^レ劣。若存^レ別

- 體者再數及六重故。或又彼一開レ五。故非再數歟。仍經中不レ説耳。第二義爲レ勝矣。」とある。
- (15) 續眞全六・五四頁上〜五二五頁上。
- (16) 大正六〇・二五九頁上中。
- (17) 那須政隆『大日經口疏講義』一三九頁。
- (18) 大正六〇・一四三頁上中。
- (19) 『柚保隱遁鈔』第一三「由有無明」、眞全一〇・三七七頁上。
- (20) 近年、『祕藏記』については、文獻學の發達によって成立年代の考證がなされつつある。ただし、『祕藏記』に増廣を認めるか否かによって成立年代が異なってくるため、十世紀末から十一世紀初頭の間で諸説出されている。『祕藏記』の成立年代考については、向井隆健『『祕藏記』成立考』、『密教學研究』五。大澤聖寛『『祕藏記』の撰述年代』、『密教學研究』二四。同「祕藏記の成立年代再考」、『印度學佛教學研究』四七一。甲田有咩「祕藏記解題」、『定本弘法大師全集』五。米田正弘「『祕藏記』の成立年代」、『密教文化』一八六等参照。
- (21) 有快は『祕藏記傳授鈔』（續眞全一六・八七頁上）において、『祕藏記』の作者について二説擧げている。第一説には不空口説惠果御記の本を空海が將來したとする。第二説には惠果の口説を空海が記した本であるとしている。有快はいずれの説をとるのかを明らかにしていないが、『祕藏記』が空海の關與していた書物であると看做している。
- (22) 『宗義決擇集』「由有無明」有快、眞全一九・二四三頁上。
- (23) 森田龍僊『釋摩訶衍論之研究』。大山公淳『密教史概説と教理』。楠正仁「釋摩訶衍論における無明の構造」、『大正大學大學院研究論集』三。楠正仁「釋摩訶衍論における根本無明の一考察」、『智山學報』二九輯等参照。
- (24) 大正六〇・二九三頁下。
- (25) 『釋論決擇集』卷八「根本無明法執義」、新版日藏・眞言密教論章疏卷下・七八頁下。
- (26) 大正三三・五七四頁中下。
- (27) 眞全八・三九〇頁。
- (28) 新版日藏・眞言密教論章疏卷下・八七頁上。
- (29) 大正六〇・二六四頁上。
- (30) 定弘全五・一四七頁。
- (31) 續眞全一六・一一四頁下〜一一五頁上。
- (32) 『宗義決擇集』「由有無明」有快、眞全一九・二四六頁上。
- 〈キーワード〉 有快、根本無明、『大日經』三劫段、『釋摩訶衍論』、『祕藏記』